

縞の財布

野村胡堂

一

「親分、元飯田町の騒ぎを御存じですかえ」

「何んだい、元飯田町に何があったんだ」

ガラツ八の八五郎が又ツと入ると、見通しの縁側にしゃが踞んで、朝の煙草にしている平次は、気のない顔を振り向けるのでした。

江戸中にちようほう謀報の網を張っている順風耳の八五郎は、毎日下っ引が持ってくる夥しい事件の中から、モノになりそうなのを一応しおびただ

らべて親分の銭形平次に報告するのです。

「なアに、つまらねえ物盗りなんだが、怪我人があるから、まないたばし俎橋の大吉親分がやつきとになって調べていますよ」

ガラツ八が、つまらねえと片付ける事件に、飛んだ大物のあることを平次はときどき経験しております。

「大吉親分がやつきとなるようじゃ馬鹿にはなるまいよ。誰が怪我をして、何を奪とられたんだ」

「元飯田町の加島屋——親分も御存じでしょう」

「後家のお嘉代というのが荒物屋をやって、内々は高利の金まで廻いんじょうしているという名題の因業屋だろう」

「その加島屋へ宵泥棒が入ったんで」

「フーム」

「手代の与之松は使いに出た留守、伴の文次郎は町内の風呂、娘のお桃はお勝手でお仕舞の最中、後家のお嘉代がたった一人で金の勘定を済ませ、用筆筒ようだんすへ入れたところを、後ろから忍び寄った曲者に脇腹を刺さされ、あつと振り返るところを、手燭てしよくを叩き落されて、用筆筒の財布さいふを盗まれたんだそうで」

「財布にいくら入っていたんだ」

「三百両という大金ですよ」

「それからどうした」

「物音におどろいてお勝手から娘のお桃が飛んで来ると、母親は血だらけになって眼を廻している。曲者は狭い庭をせま一と飛びに、生垣を越して逃げ出したんだそうで。——昨夜はずいぶん暑かったが、それにしても縁側を開けたまままで金の勘定をしていたのは、少し用心が悪過ぎましたね」

「八五郎なら叔母さんから貰ったお中元の小銭でも、用心深く便所の中へ持込んで勘定する」

「冗談でしょう」

「ところで加島屋の後家の傷は？」

相変らず冗談を交換しながら、平次には事件の外貌を八方から

探ろうとする興味が動いた様子です。

「ひどい傷だが、気丈な女で、手当をさせながら、いろいろ指図をしていきますよ。外科の話じゃ、ただ突いた傷なら急所を除けてよいるから大したことは無いが、存分に抉えぐった傷だから、請合い兼ねるといふことで」

「曲者の姿を見なかつたのかな」

「チラと見たような気がするが確かなことは判らないといひますよ」

「それつきりじゃ仕様がな。ともかく、暫くのあいだ見張つているが宜い。まないたばし 俎橋の大吉親分が手柄にするのは構わないが、女一

人斬つて三百両という大金を奪つたのは放っておけない」

「何を見張るんで？ 親分」

「三百両の金を易々と盗つた手際は、充分狙つた仕事だ。加島屋の家の者と、出入りの者、それから近所の衆に気をつけるが宜い。もう少し念入りにするには、倅のなんとか言つたな——」

「文次郎ですよ。先妻の子で、お嘉代には継しい仲だが、ちよつと好い男で——もつと尤も近ごろは隣の九郎助という者の娘お菊と仲が良いそうで」

「その文次郎の出入りを調べて見るが宜い。継母との仲が良いか悪いか、金の要ることはないか、騒ぎのあつた時刻に、本当に風

呂に行っていたかどうか、まま継しい仲でも、親を手に掛ける筈はあるまいが、文次郎の仲間や友達に悪いのはないか、其処までたぐるんだ」

「へエ——」

「ついで序に娘のお桃のことも、倅と仲の好い隣の娘のことも一と通りは調べるんだな。それから手代の与之松は本当に使いに出ていたかどうか、そいつは大事だ。——もう一つその三百両の金は、何処から入った金か、それも聴いておくに越したことはない」

「へエ——」

「あとさき後前の様子を見ると、流しや出来心で入った泥棒ではあるまい、

判ったか、八」

「へエ——、判ったような判らねえような、まア行つて見ますよ、親分」

そんな心細い事を言いながら、ガラツ八はもういちど元飯田町へ飛んで行きました。

二

この見かけの極めて単純な事件が、たんじゆん思いも寄らぬ複雑なものになろうとは、銭形平次も思い及ばなかったでしょう。

「サア、大変ツ、親分」

ガラツ八の八五郎が飛込んで来たのはそれから二日目でした。

「とうとう大変が来やがった。皿小鉢を片附けるんだ、静」

一向驚く様子もなくそれを迎える平次。

「落着いちゃいけませんよ、親分。まないたばし 俎橋の大吉親分は、加島屋の

伴文次郎を縛って行きましたぜ」

「母親が刺された刻限こくげんに、町内の風呂に居なかつたんだろう」

「どうしてそれを？ 親分」

「そんな事だろうと思つたのさ。それから何うした」

「文次郎も若い盛りだから、少しは借金があるようで」

「それで母親の虎の子を狙ったというのか」

「なアに借金は五両や十両で済むが、日頃継母のケチなのが気に入らなくて、友達にもこぼし抜いていたというから、つい疑われるじゃありませんか」

「後家のお嘉代かよはそんなに吝けちだったのか」

「田螺たにしのお嘉代と言われた女ですよ。店を女手一人で切り廻している外に、高利の金まで貸して、手いっぱいに働いていたんだそうで、四十五だというのに、なりも振りも構わず、鬼婆アのようにたなって働いていますよ」

「それで溜ためた三百両か」

「どんなに口惜くやしいか、それから泣いてばかり居たんだそうで、鬼婆アの角も折れたんでしょう」

「傷はどうだ」

「だんだん快いいようで、外科も驚いいていますよ」

「手代は？」

「与之松という遠縁の者で、——二十八という男盛りだが、少し足りない方で、使い走りと店番のほかには役に立ちません」

「その日は確かに外に居たんだらうな」

「日本橋の店へ使に行つて、こいつは確かに留守でした」

「近所に変つたことはないか」

「隣の九郎助というのは町内でも物持で、しもたや暮しをしているが、人の物などに眼をつける人間じゃありません。その娘のお菊というのが文次郎と変な噂のある女で、これはちよいと踏めま
すよ」

「女衞ぜげんみたいなこと言うな」

「後家のお嘉代は九郎助と仲が悪くて、若い二人の仲をあまり喜ばないそうですよ」

「八、誰か外そとに待っているじゃないか、若い女の人のようだが」
不意に、平次は話半分にして、入口の方を覗くのでした。

「加島屋のお桃さんが来ていますよ。親分に会って、ぜひお願い

がしたいって」

「なぜ入れないんだ。——つまらない遠慮じゃないか」

「へエ——、会って下さるんですか、親分」

「会うも会わないもあるものか、俺にそんな見識けんしきがあるわけはない。若い娘さんを岡っ引の門口に立たせておく奴があるものか」

「へエ——」

驚いて飛んで出た八五郎、格子を勢いよく開けて、バアと外へ顔を出しましたが、そこには誰もいません。

「おや？」

「どうした八」

「居ませんよ、確かにここに待っていた筈なんだが、変だなア」

「だから余計な細工をするんじゃないと言うんだ」

口小言を言いながら、平次も草履ぞうりを突っかけて、路地の外まで

出て見ましたが、若い娘の姿は愚かおろ、その辺には雌犬めすいぬ一匹いなかったのです。

「どうしたんでしよう、親分」

「行って見よう。なんか変わったことがあるのかも知れない」

平次と八五郎は、支度もそこそこ、お桃を追うともなく、宵闇の中を、元飯田町まで駆けました。

加島屋の入口に差しかかると、中から手代与之松に送られて出て来た、中年輩の武家と摺れ違すいました。薄明りの中で、よくは判りませんが、色の白い、背の高い、身扮みなりは至って粗末ですが、いかにも立派な男で、行き違いざま、平次とガラツ八の顔を見て、軽く会釈えしやくを返して往来へ出て行きます。

「あれは？」

平次は与之松に訊ねました。

「中坂の御家人藤井重之進様で」

与之松は答えます。これは二十七八のいかにも気の抜けたような男です。

「用事は？」

「私には判りませんが、——へエ」

「よしよし、それじゃ主人に訊こう、容体はどうだ」

「少し疲れたようですが、大したことはございません」

そう言う与之松に案内させて、荒物屋の店の奥、曾かつて三百両の
大金を盗られた六畳に通りました。

「お神さん、銭形の親分だよ」

八五郎が先廻りをして言うと、

「あ、銭形の親分さん、有難うございます。親分さんなら倅を助けて下さるでしょう。お願いでございます、親分」

手負のお嘉代が、無理に身体を起そうとするのを、平次はやつと押えながら、

「起きるんじゃない、——そのままが宜い、そのままが。——と
ころで、飛んだ災難だったな、お神さん。三百両というのは容易ならぬ金だ、それを盗られた上怪我^{けが}までされちゃ」

「有難うございます。それもこれも私の油断からでございます。倅に疑いがかかるなんて、飛んでもないことでございます」

継母のお嘉代はひたむきに倅の文次郎の冤^{むじつ}を訴えるのです。

「ところで、三百両の大金は、不似合と言つてはおかしいが、用よう筆筒だんすなどへ手軽に入れておく金じゃない。どこから受取つたとか、何にする金だったとか、それだけでも訊きたい——傷に障さわらなきや話してくれまいか」

「大丈夫でございます。お蔭様で傷の方は一日一日快くなるように、もう少しくらい話しても障るようなことはございません。それに、銭形の親分さんなら、ぜひお耳に入れて置きたいこともございます」

お嘉代は熱心に平次を見上げました。

「フーム、俺も訊いて置きたいことがある」

「まず、三百両の金を用筆筒へ入れて置いたわけでございます。それは、あの翌る日、その金をそっくり人様にお渡しする約束がございました」

お嘉代は少し息が切れる様子でしたが、それでも思いのほか元気につづけます。

「払ってやる先？」

「今しがた親分さん方は、店先でお武家様にお逢いじゃありませんか——立派なお武家様に」

お嘉代は『立派』という言葉に力を入れました。

「逢った、中坂の藤井なんとかいう——」

「藤井重之進様でございます。三百両の金は、あの翌る日、あの方に差上げる筈でございました。——私の油断から、あの金を盗られてしまったては、配偶つれあいが死んでから十五年の間の、骨を削けずるよ
うな苦勞も、皆んな無駄になつてしまいました」

お嘉代はそう言つて、ガツクリ首を垂れるのです。ぐっしより枕をひたす涙、人知れず今までも、幾度か泣いていたのでしよう。

「それはどういふわけだ、お神さん」

「聴いて下さい、親分さん方、これには深い仔細しさいがございます。

——私の夫加島屋文五兵衛は、西国のさる大藩つかに仕え、三百石を頂戴した立派な武家でございました。若い頃同藩重役の子と争つ

て傷つけ、永の御暇となつて江戸に出ました。武芸学問人に後を取らぬ夫でございましたが、運悪く幾年待つても帰参叶かなわず、二君に仕える心もなく、貧苦の中に相果てました。残つたのは私には義理ある仲の倅文次郎と、私の腹を痛めた娘桃の二人。——夫は生前、加島家の没落ぼつらくを歎き、どの様にしても倅文次郎を武士に仕立て、家名を挙げることを心掛けておりましたが、倅は柔弱にゆうじやくな生れで、武家奉公などは思いも寄りません」

「——」

手負ながら、お嘉代の烈々れつれつたる気魄きはくが、その打ち湿しめつた言葉のうちにも、聴く者の肺腑はいふを抉えぐります。

「倅を武家にする手段は、この上たった一つ、御家人の株を買うほかはございません。が五十俵三十俵の御家人の株でも、御存じの通り三百両は要ります。——それから十五年の長いあいだ、私は喰うものも喰わず、年頃の娘に着せるものも着せず、必死と成って金を溜めました。荒物を売った儲けもうでは、纏まとまった大金を手に入れることなど思いも寄りません。恥かしいことですが、高い利息の金まで廻して、必死と溜めた金が二百九十二両、それに明日になったら、私の母から譲られた形見の櫛笄くしこうがい、亡夫の腰の物のうち、不用の品を売払って八両の金を纏まとめ、予て約束の中坂の藤井様にお届けする筈で、黄八丈の財布さいふに入れたまま、この部屋

の用筆筒にしまったところを盗られたのでございます」

「――」

「藤井重之進様は、身にも命にも代えられない大事で、三百両の金が入用だと申します。あの翌る日は、――今日から二日前に、あの三百両をお届けして、伴の文次郎を名義だけの養子に届出、藤井家の御家人の株を私が譲り受ける約束でございました。――三百両の金がなくなつては、それも果敢はかない望でございました。先刻藤井様が直々御見えになつて、金は二日前に入用であつた、さんざん待つたが届けてくれなかつたので、他から融通ゆうずうして用事は済んだ。株売買のことはこれで打切るようにとのお言葉でござい

ました」

藤井重之進がここへ来たわけが、それでようやく判りました。こう語り終ったお嘉代は、亡夫の望を果し得なかつた腑甲斐ふがなさ
と、十五年間の爪とに灯すような苦心を思い起して、たださめざめ
と泣くのです。

「それは気の毒だ。——が、まア気を大きく持つが宜い。人の運
が何処にあるかもわからず、御家人の株を買ったから仕合せにな
ると限ったわけでもあるまい」

平次はそう言った生温い慰めの言葉をくり返す外はありませ
ん。

四

「親分変なことになつたじゃありませんか」

ガラツ八は涙を横なぐりに拭いて、平次の後を追います。縁側から狭い庭へ降りて、生垣をいけがき一巡り、平次はいつもの流儀で、洩もれるところなく四方の情勢を調べるのでした。

「ただの荒物屋のお神さんと思つたのが間違ひさ、大した母親だよ。あの心持を聴いたら、大概たいがいの道楽息子も眼が覚めるだろう。お前は歸りに番所へ廻つて、文次郎にあの話をしてやるが宜い。

文次郎はまだ知らずにいるんだらう、唯の吝けちなお袋くらいに思っている様子だ」

「へエ——」

「それから、中坂の藤井重之進という御家人も序ついでに調べて置こうじゃないか、下っ引を二三人狩り出して、暮し向きから金の出所、近頃の様子など、こいつはわけもなく判るだらう」

「へエ——、それじゃ行つて来ますよ、親分」

「待て待て八、変なものが落ちてるじゃないか、おや」

平次は庭の隅すみから何やら拾い上げました。

「財布じゃありませんか、親分」

「黄八丈の財布だ。中味はしつかり入っている。この中に三百両入っていると話が面白くなるぜ、八」

平次は財布を持って、部屋へ引返しました。行燈の下には手負のお嘉代が、やといばあ雇婆さんにみと看護られて、ウトウトしている様子です。

「お神さん、盗られた財布はこれですかえ」

八五郎は声を張りあげます。

「おや？」

お嘉代は半身を起しかけて、傷の痛みそのまま床の中に埋もれました。苦痛と好奇ときょうがく驚愕と、いろいろの感情がその眼の中に動きます。



©2017 萩 柚月

「それですよ。盗られた財布はそれに相違ありません。何処から出て来ました、親分」

「庭の隅に落ちていたんで、——中には小判で確かに三百両」

平次は馴なれない手付きで、一枚一枚小判を数えております。山吹色が行燈の灯に反映して、時ならぬ華やかな空気を醸かもしますが、事情は息づまるほど緊張して、ガラッ八とお嘉代の眼は、その数を讀む手に吸いつきます。

「三百枚——確かに三百両」

平次は最後の一枚をチーンと鳴らします。

「そんな筈はありません。中に小判は二百九十二両、八枚足りな

い分は、翌る日髪の道具と腰の物を売って三百両になる筈でございました

お嘉代の調子は上摺うわずりました。

「考え違いじゃないかお神さん、小判は確かに三百両あるんだが」
「いえ、二百九十二両でございました。間違えよう筈はありません」

「さア判らねえ」

平次は高々と腕を組みました。その真似をするともなくガラッ
八も、

「すると、その八両はどこから紛まぎれ込んだ、親分」

「俺に訊いたって判るものか」

「財布は確かに盗まれた品なんだね、お神さん」

と八五郎。

「それに間違いございません、私が縫ぬった財布ですから」

「もういちど外へ出て見よう、八」

平次は八五郎を誘さそってもう一度庭に降り立ちました。手代の与之松と雇婆さんに立ち会って貰もらって、財布の落ちていた場所を見せましたが、夕刻まで其処そこになんにも無かったことは確かで、派手な黄八丈の財布が、狭せまい庭にあるのを、白日の下に気が付かずにいる筈はずありません。

して見ると、財布の持込まれたのは暗くなつてからで、あの事件があつてから、木戸はよく閉めておくようですから、外から投げ込んだものと見るのが当然です。

「盗る方には用心はあるが、金を投げ込む方には用心はない。こいつは大分わけがありそうだよ、八」

平次は八五郎を眼で誘つて、いきなり隣の九郎助の家へ――。

「御免よ」

遠慮なく表の格子を開けます。

「へエへエどなた様で」

格子を開けて招じ入れたのは、五十二三の実体な男でした。

「俺は神田の平次だ」

「へエ、銭形の親分さんで」

「この財布を知って居るだろうな」

「――」

九郎助の顔色はサツと変りました。

五

「親分さん、お疑いは御尤ごもつともですが、私はなんにも存じません」

九郎助は灯から顔を反けるように、ただおろおろと弁解するの

です。見る影もない中老人で、半面に青痣あおあざのある、言葉の上方なま訛りも妙に物柔かに聞えます。

「いや、隣のお神さんを刺したのはお前とは言わない。——あの晩まで木戸を閉めずにいたようだから、生垣いけがきを越せば、曲者は外からでも入って来られる。——が今晚は違う。木戸は嚴重に閉めてあったし、すぐ生垣の向うの部屋にいる俺たちに聞かせないよ。うに、その財布を投げ込むには、この家の庭から竹桿たけざおの先かなんかに引つ掛けて、そつと送り込むほかはない、どうだ——」

平次は九郎助の顫える頸くびを見ながら続けました。

「——それに、あの財布を盗んだ奴が投げ込んだのなら、金高が

二百九十二両になつてゐる筈だ。八両多くなつてちよつと三百両入つてゐるのはどういふわけだ」

「——親分さん、それは——」

「まだ言うのか九郎助。——お前はどこかで見つた事のある顔だ。

——その青痣あおあざは、刺青いれずみじゃないか。鬢びんの毛がもう少し濃くて、痣あざ

がなくて、五つ六つ若くすると、——あつ、手首の入れ墨」

平次に凶星を指されて、逃げ腰になる九郎助を、八五郎は後から追つ冠せるように押えました。

「恐れ入りました、親分」

「お前は鼪いたちの七じゃないか」

一時海道筋から江戸へかけて、悪名を謳うたわれた窃盗せつとうの名人、それは鼬うしと異名を取った七助の成れの果てだったので。

「恐れ入りました。銭形の親分さんと聴いて、あつしもう観念しておりました。——でも七年前に悪事の足を洗って、それから人様の物塵ちり一つ取りません。御慈悲でございませ、——お見逃しを願います」

涙とともに畳に額を揉もみ込む七助の九郎助。

「人の物塵一つ盗らなくたって、人の庭に三百両も投げ込むのは穏かじゃないぜ。どうしたというのだ、七」

「親分、——親馬鹿でございませ、笑って下さい」

悪党らしくもなく、平凡へいほんに老いさらばえて鼪いたちの七助は涙とともに語るのです。

それによれば、隣の伴文次郎と、自分の娘お菊との仲を薄々気が付きながら、七助の九郎助は若い二人の心持を汲んで、とがめる気にもならず、出来ることなら無事に添そわして喜ぶ顔が見たい心持でいっばいだったのです。

文次郎とお菊は、素より継母の深い心も知らず、ただもうお嘉代まれの世にも稀りんしょくなる吝嗇りんしょくに愛想を尽かし、日頃心ひそかに怨んで、しばらく江戸から姿を隠そうと、相談してゐるのでした。一つは継母のお嘉代が文次郎を武士にするために、素姓の怪しい九郎助

の娘などと嫁合めあわせる気は毛頭なかつたことも、若い二人を苦しめる原因の一つだったのです。

お菊の父親七助も、お嘉代の吝嗇りんしよくを憎む心に燃え、内々は若い二人の相談相手にまでなっていた有様で、三日前お嘉代が刺さされ、三百両の大金が盗まれたと聞いたとき、ハツと思ひ当つたのも無理のないことでした。

まもなく俎橋まないたばしの大吉が文次郎を縛つたと聴いて、なんとかして文次郎を救い出し、娘の喜ぶ顔が見たいと思ひ込んだのです。

その時フト自分の家の庭の植込の中から、黄八丈の空財布を見付けました。多分お嘉代を刺した曲者が、盗んだ財布の中味を抜

いて、生垣の中に空財布だけをつっ込んで行つたのを、犬でも銜くわえて来たのでしよう。

無くなつた金は大概みに三百両と聴いた七助は、その金が御家人の株を買う金であつたとも知らず、曾かつて自分の持かせぎ溜めた錢で、今は僅かに残る貯えの中から、ちようど三百両を取出して財布に入れ平次が推察した通り竹桿たけざおの先に引つ掛けて隣の庭に入れたのです。

「恐れ入りました親分、人の為め悪かれと思つてやった事ではございません。娘可愛さに飛んだことをしてしまいました。どうかお許しを願います」

曾かつての悪者、鼬いたちの七助の哀れ深い姿を見て、平次は苦笑するばかりです。

「人の物を取るのも悪いが、無分別に人へ金をやるのも良い事ではないよ」

「へエ——」

「ところで、あの晩、隣の荒物屋に入った曲者を、お前は見ている筈だと思うが」

七助の口吻くちぶりから、平次は早くもこの機微を掴んだのです。

「へエ——」

「文次郎は風呂に居なかつたそうだが、文次郎なら自分の家に忍

び込むのに、生垣を飛び越して入ったり、空財布を庭へ捨てるよ
うなことはあるまいと思うが」

「それで御座います親分さん、私もどうしても文次郎さんを疑う
心になれませんでしたが——」

平次の助け船に七助は膝を進めました。

「思い当ることがあるだろう。後さきのことを詳しく話くわしてみる
が宜い」

「あの晩お隣の文次郎さんは、風呂へ行つたことにして、私の娘
と俎橋まないたばしの辺で逢っていたそうで——」

「そんな事だろう」

「それに、私は曲者の逃げる姿をチラリと見掛けましたが、生垣を飛越した様子が、大抵の身軽さじゃございません。私も若い時分はいたち鼬とか何とか言われた人間ですが、四尺以上で幅のある生垣いけがきを夜目にああ器用に飛べるものじゃございません」

七助から聴き出したのは、大方そんな事だけ。

「それだけでも大変役に立つよ。——ところで、言う迄もないことだが、逃げたり隠れたりするようなことはあるまいな。鼬の七助という名前は事と次第ではこの場限り忘れてやるが」

「有難うございます、親分さん」

帰って行く平次を、もう一人、隣の部屋で拜んでいる者があり

ました。颯の七助には似もやらぬ美しい娘。——それはお菊の泣き濡れた痛々しい姿です。

六

「さア、判らねえ、親分」

それから二三日経って、ガラツ八はいきなり斯こんな事を言い出したのです。

「うるさい奴だな。——お嘉かよ代を刺して二百九十二両を盗った曲者なら分っているじゃないか」

銭形平次は事もなげにこた応えました。

「へエ、——誰です、そいつは？」

「人を刺して、いきなりえぐ抉るのは、武芸の心得のある者だ。素人のめくらづ盲目突きではない。——曲者はあの晩加島屋に三百両の金が用意してある事を知っている武家だ。——四尺以上で幅のある生垣を苦もなく飛越すのは、武芸の心得も相当以上だな。——それ程の武家はきつと自分の刺した加島屋の後家ごけの様子を見に来る筈だ」

「？」

「加島屋に三百両の金がなくなるとホツとする人間がある。——」

その曲者は多分加島屋の娘のお桃に顔か身体を見られたと思つてゐるんだらう。お桃を誘拐かどわかすか、殺した上でないと、加島屋へ顔を出せない」

「すると、親分」

「俺はもう、中坂の藤井重之進うちむぎの内向うちむぎのことを調べているよ。御家人の癖くせに賭事かけごとに凝こつて首も廻らぬ借金だ。一時は御家人の株まです売ろうとしたが、二三日前から急に金が出来て、ポツポツ借金を返し始めた」

「なんて太え事をしやがる、行きましよう、親分」

「相手は小身でも直参だ。町方の岡っ引じゃ手が出せねえ」

「そんなわからねえ事があるものか、親分、あの娘が可哀想じゃありませんか」

ガラツ八の八五郎は、躍起やつきとなつて平次の袖を引くのです。

「金は戻るまい。——があなの娘だけは助けてやりたい。お前手紙を持って行つてくれるか」

「殴り込みなぐでもなんでもやりますよ、親分」

はやるガラツ八を撫なだめて、平次が書いた一本の手紙。それを中坂の藤井重之進の家へ届けた晩、加島屋のお桃は無事で家へ戻りました。

手紙の内容は、加島屋の曲者の残した証拠の数々を挙げて、お

桃が今晚中に帰らなければ、竜の口評定所に同じ文面で訴え出ると書いただけですが、弱い尻を持った藤井重之進は、お嘉代が助かったと見て、急に妥協的になり、近所の空家に隠しておいたお桃を下男に引出させて加島屋に返したのです。

×

×

「相手が悪いから、この上取って押え様はないが、悪事を働いて長い正月はあるめえ。天道様のなさる事を見ていることだ。――

その腐くさった御家人の株を買って倅を一本差にしようなどとは悪い量見だぜ。諦あきらめて真面目な家業に励むが良いよ。盗られた金は惜かしいが稼かせげばいくらでも出来る。現にお隣の九郎助が二人を一

緒にして三百両の資本をやりた^{もとで}いと云つてゐるじゃないか」

平次はそう云つて、病床のお嘉代を慰めるのでした。文次郎も継母の深い心に打たれて、すっかり良い息子になり、やがてお菊と祝言した事は言うまでもありません。『人の悪いは飯田町』と言われた飯田町の安御家人の中には、こんな性の悪いのがうんとあつたのです。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

縞の財布

初出―「オール讀物」昭和十八年八月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第七卷
河出書房 昭和三十一年八月五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>